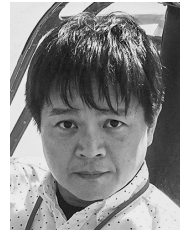


シリーズ：日常管理のノウハウ

第16回 定期検査・定期確認及び相互自主点検の活用



東山 真二

大阪大学微生物病研究所は感染症学、免疫学等の基礎研究を遂行するため大阪大学に設置された附置研究所です。事業所内には細菌やウイルス等を扱う3階建ての感染症共同実験棟（BSL3施設）があり、その1階部分是非密封RI実験室となっていました。しかし約10年間にわたり利用者は1名しかおらず2018年度にはその利用者が異動したので、筆者から思い切って、このRI実験室を廃止する提案をしました。非密封RI施設は他にもあり、この施設は建物の老朽化が進み土中埋設配管でもあるので事故が起きる前という思いが強くありました。この土中埋設配管の漏水点検は、これもノウハウですが、着色水の各流しからの流入水量と貯留槽手前にある分配槽での回収水量を比較する方法を取っており、回収水量が少ないとほぼ自動的に管理区域外への漏えいを意味します。利用頻度も低くリスクが高いという判断で一般のBSL3実験室にすることが所内で承認され、軽微変更届を提出しました。少し安心していると、数年来大学本部に出したまま忘れていた営繕要求がとあったので土中埋設配管を二重配管化するという連絡があり、慌てて予算要求を取り下げるといふドタバタもありました。無事2020年3月に廃止後、程なくして客船の乗客から分離されたSARS-CoV-2がこのBSL3実験室に搬入され新型コロナウイルス感染症の研究が始まり、今ではその余波で手狭となった感染症共同実験棟の建替えまで計画されるに至っています。RIの利用とは結び付きませんが、もし二重配管化してしまうとその予算の性質上20年は建物を壊せない条件が付くとのことでしたので、研究所全体としての研究環境整備にはタイミング良く一役買ったと思っています。

本題ですが、帳簿等ソフト面の管理について、筆者にとって一番役立ったのが法定の定期確認でした。前任者が定年退職する前年に定期確認の制度が始まり、前任者と共に初めての定期確認を受けまし

た。筆者は主任者試験に合格したばかりで選任1年目、前任者に頼るしかありません。検査員がリストに従って要求する帳簿を次々に提示して、必要な項目に抜けが無い確認。いや、まず言われている帳簿がどれのことなのか分かりません、話はそこからなのです。検査員の方も驚かれたと思いますが、1日目で定期確認は終わらず、口頭で指摘を受けた箇所については翌日に修正済みを確認してもらうため、日付が変わるまで当時のRI施設長も一緒になって帳簿を修正しました。途中で上着を脱いで腕まくりを始めた検査員の姿は今でも目に焼き付いていますが、検査が長時間にわたり苦勞している筆者への同情もあったのか、途中からは検査というよりも法令の解釈や指針をどう反映させるかについて丁寧に教えていただくような状況でした。例えば、手書きの使用簿について特に外国人利用者が多いこともあり氏名（フルネーム）を書いてもらうのが難しかったのですが、個人に割り振っている管理番号を書き、氏名との対応表と一緒にファイルする方法は、この時に教えていただきました。主任者1年目でのこの経験は特殊だと思いますが、定期検査・定期確認はただ合格すれば良いと考えるのではなく、普段は無い第三者の目で見てもらい、アドバイスあるいはノウハウを得る良い機会だと捉えることが重要だと思います。他にも本学では定期的に他のRI施設を相互に点検する取組みがありますし、他大学でも同様の取組みがあるようです。本学ではありませんが、関係の近いRI施設同士だと点検を通じてお互いの関係が悪くなるというような話も聞きます。このような機会が無い場合は、有料にはなりますが外部機関の点検を受けるのも、特に経験の浅い管理者にとっては、これまでに気付いていない日常管理のノウハウを得る良い機会になると思います。

（大阪大学微生物病研究所）